

## 関一市長時代の大阪市



今年 11 月に実施が確実視される住民投票により、大阪市が廃止され「特別区」なるものに解体されるかもしれない。「都」構想という名による、大阪府の大阪市乗っ取りだ。大阪の歴史から学び、大阪市を存続させることが、どんなに大切なのかを多くの人に伝えたい。

今の大阪は、関一市長時代の市政抜きには語れない。それで宮本憲一「アメニティと美をもとめて—『社会資本論』をめぐる風景③完」有斐閣『書齋の窓』1998 年 5 月の一部を抜粋して紹介したい。(ヘインズ氏著書カバー写真の関一市長は大阪市史編纂所提供)

1914(大正 3)年、東京高商(現一橋大学)教授関一は大阪市の高級助役に就任し、以後、1923(大正 12)年に市長となり、大阪市の近代化につとめた。関一は理論と実践をかねそなえ、日本都市史上最高の首長であった。

関は初志をつらぬいて、大阪市政の根本的革新をすすめた。当時の大阪は自由なふんい気もあったが、粗悪な輸出品をつくったり、労使の慣行も古かった。この大阪を近代産業都市とするべく、関はいまにいたるまで機能している大阪の社会資本の骨格のすべてを計画し建設したのである。パリのシャンゼリゼに比較される御堂筋などの道路網、地下鉄・市電・電力事業・港湾・橋梁・上下水道などは彼の手ではじめられた。関の都市政策の目的はアメニティのある(住み心地よき)都市をつくることであった。彼が助役時代に書いた『住宅問題と都市計画』では、これまでの都市計画は、中央集権主義、道路中心・美観主義であったが、これからの都市政策は分権主義、住宅中心・保健=実用主義でなければならぬとしている。そのことばどおり、先述の産業基盤だけでなく、彼は労働者住宅・保育所・公設市場・公園などの生活基盤をつくった。そして衛生研究所をつくって、常時大気汚染観測をはじめたのである。

美観主義を批判しているが、それは、ナポレオン三世の栄光のためにつくったパリの都市計画のような専制君主の権威主義を批判しているのである。先に述べたように市民のアメニティこそ彼の市政の目標であったから、彼のつくった社会資本はすべて美しい。たとえば、五線の大道の御堂筋は銀杏並木に映えるように、沿線の建物の高さを 33メートル(100 尺)でそろえた。街並みの景観としては日本の大都市最高の美観であろう。堂島川にかかる水晶橋や可動橋は、階段をのぼると舞台のような平面が開け、滝が橋の中央から落ちていて、幻想的な美しさである。大阪のシンボルとして、大阪城を復元したのも関の時代である。関は 1928(昭和 3)年に、日本で最初の自治体経営の大阪商科大学(現大阪市立大学)を設立した。彼はこの設立の辞にあたって、この大学は帝国大学のコピーであってはならず、現実の研究の上に立って、市民文化の殿堂となれとのべている。また、都市政策の科学をもとめて、東京の市政調査会に対抗して、大阪都市協会というシンクタンクをつくっている。

(2020 年 1 月 25 日)